



TITLE:

# 意味の発見の場としての詩と解釈

AUTHOR(S):

檜和, 千春

---

CITATION:

檜和, 千春. 意味の発見の場としての詩と解釈. Dynamis: ことばと文化  
2002, 6: 178-186

ISSUE DATE:

2002-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87681>

RIGHT:

[研究会報告 1]

意味の発見の場としての詩と解釈<sup>1</sup>

檜和 千春

1.0 「解釈」とことばの研究

統語論

統語分析は「形態的な構造から、明示的な有限の手続きによってある種の論理的な構造を取り出す試み」である。しかし、意味を考えずに下位的構成要素に分割することはできない。またひとつの形式が複数に分割できることもある（統語的曖昧）。

(5) Flying plane is dangerous.

(6), (7) の構造分析・構造記述としては [主題 + 解説] とするだけでは不十分。[主体 + 動作] [対象 + 動作] という差異がある。

(5) 彼は読んだ。

(6) 本は読んだ。

(5) は [彼ガ + (何かヲ) + 読ンダ] ガ格名詞の主題化。(6) は [(誰カガ) + 本ヲ + 読ンダ] ヲ格名詞の主題化。しかし、(5) がつぎのような発話に用いられた場合、「彼」はヲ格名詞の主題化であるとされ、ad hoc に説明されることとなる。

(7) 大江健三郎か、彼は読んだ。

テキスト言語学と談話分析

テキスト言語学や談話分析は、文と文、あるいは、個々の発話が集まってまとまりをなしたレベルでのことばの研究を目的としている。解釈とは主に照応や指示の同定をすることを意味する。

---

<sup>1</sup>2001 年 5 月発表。

## 語用論

言語使用の中での意味を研究対象にしている語用論において解釈とは、あることばの抽象的意味（ことばが可能性として持っている意味）が実際の発話で何を指示しているかを考えることにより、それを文脈上の意味（発話の意味）に同定することである。さらに、発話行為としての意味、即ち、発話意図を理解することも解釈である<sup>2</sup>。つぎの発話は実際の発話の文脈に位置づけて it の指示を何と同定するかによって、意味が変わる。

(8) “Let him have it!”

おもちゃを掴んで放さない弟と取り上げようとする兄に対する親の発話でもあり得る。または、非行少年が、警官と争っている銃を持った共犯者に叫んだことばでもあり得る。この場合、さらに警官を撃てか警官に銃を渡せ (it が弾を指すのか、銃を指すのか) という、どちらの意味に解釈するかによって少年の意図の解釈も変わり、量刑が変わる<sup>3</sup>。(8) は位置づける文脈しだい、さまざまに解釈され得るが、ひとつの文脈では一意に解釈されることが前提にされている。指示の曖昧さなどの問題で複数の意味に解釈される可能性はあるが、警官を撃てと警官に銃を渡せの両方が同時に (8) の意味であると解釈することはできない。

テキスト言語学、談話分析、語用論を含め、従来の言語学は慣習的で自明な「解釈」を暗黙の前提としていた。「解釈」が問題となるのは照応や指示の同定である。語用論など言語使用における意味を取扱う場合でも、ひとつの文脈に一意の解釈を想定しようとする傾向がある。

## 2.0 創造的な言語使用における解釈

言語使用の場における発話/テキストには多様な解釈が許容される。発話/テキストが位置づけられる文脈がたくさんあって、個々の文脈には一意の解釈が対応すると考えることもできるが、ひとつの文脈の中にも複数の解釈が存在しうるとも考えられる。今まで文脈を定義せずに用いてきたが、ここではおおまかに、発話/テキストから成立する言語的文脈 (co-text)<sup>4</sup> と解釈者を取り巻く状況的文脈 (解釈者の知識や信念を含む) (context) の両者を含むもの考える。この二つは相関しており、テキストや談話に結束関係を示す語句が存在していたとしても、首尾一貫性を見出

<sup>2</sup>Thomas (1995: 18).

<sup>3</sup>Ibid. 19.

<sup>4</sup>たとえば、隣接発話対 (adjacency pair) など。先行する発話が後続の発話の文脈となる。

すのは解釈者である。即ち、言語的文脈と状況的文脈の整合性によってことばの意味が解釈される。効率性という観点からすれば、発話者の意味するところや意図が正確に聞き手に伝わるためには、ひとつの文脈にひとつの解釈というのが理想的だろう。複数の文脈に複数の解釈が存在するとしても、ひとつの解釈が選ばれる規則あるいは原則を明らかにすることが研究の目的となるだろう。

一方、いくつ解釈があってもよい言語使用の場もある。創造的な言語使用では、メタファーに代表のように、慣習化された意味をもつことばを使おうとはしない。言語学でのようにことばと指示を一対一に対応させる一意的な解釈は求められない。むしろ、ことばの意味を能動的に多様に解釈することが目指され、それゆえに、ことばの新しい意味が生まれる場ともなる。

創造的な言語使用の例としての詩と、より日常的な散文を比較してみよう。詩の形式的特徴は、文として統語的に完結していないこと、接続詞によって論理関係が明示されることが散文に比べ少ないこと、照応や指示の同定をする手がかりが少ないことに由来する談話的なまとまり（結束性）のなさが挙げられる。従って、解釈者に求められるのは詩を能動的に自らの文脈に位置づけ、意味を解釈することである。これらの特徴は詩を下位的構成要素から成る全体として見ることを困難にする。一方、散文は基本的には文によって構成され、文の意味の理解には文法という慣習性の高い手がかりが存在する。文との論理関係は多く、接続詞によって明示され、解釈者は文脈と離れてすでに用意されている慣習的手段に頼ることになる。

また、解釈者がテキストに見出す首尾一貫性という観点から考えると、詩において見出される首尾一貫性とは多くの場合、解釈者の心的イメージの形成に関わることであり、どのようなイメージが形成されるかは個々の解釈者に依存する度合いが高い。一方、散文では首尾一貫性は文の論理関係に関わっており、その理解には接続詞など文法に規定されている慣習的手段が手がかりになる。

詩とその解釈を研究の場として選ぶことは、テキストと解釈の対応の多様性の中から新しい意味が生まれる場を検証することである。

## 2.1 創造的なメタファー

解釈と新しい意味の創造の考察のために、創造的なメタファーを取り上げよう。メタファーの慣習性には段階があり、全てのメタファーが創造的な意味を担うわけではない。たとえば、メタファーでしか表現できないもの（時間の前後関係）、メタ

ファーであることが意識されないほどの慣用性をもつもの（机の足）、慣用性が低く、意味の解釈は文脈に高度に依存するもの（フランスの雌犬が鎖を断ち切った）など。ここでは、解釈者の能動的な解釈が求められる創造的なメタファーに着目する。

### 3.0 メタファーの意味の発見の場としての詩とその解釈

詩というテキストでは、創造的メタファーが用いられ、読み手はそれを解釈した結果を自ら書き手としてテキストに書き記す。書き手（詩人）と読み手が同じ場所にはいないことから、会話のように状況的文脈を共有することはない。会話では先行する発話が後続する発話を制約し文脈をつくるが、詩人と読み手との間には、互いに制約しつつ同時進行で作られる文脈はない。また詩のテキストは言語的文脈をなす。

#### メタファーの相互作用説 (Black 1954) — フレームと焦点

メタファーはフレーム（隠喩以外の他の語からなる解釈枠）の中にあって初めてメタファーであると認定される（焦点となる）。Black がフレームとして考えていたのは文であるが、詩は統語的に完結していないことが多い。テキスト全体をフレームとれば、メタファーはテキストの中の他の語との関連で意味が決まる。メタファーとテキスト全体との解釈が相互作用しながら首尾一貫するように詩の解釈が進められ、テキスト自体がフレームとして読み手の解釈の自由に対し制約としてはたらく。詩の解釈（解釈結果としてのテキスト）は、原文（詩）のフレームと読み手の文脈の中で首尾一貫性をもって構築された「世界」である。読み手は詩の中の語が一貫性をもつように選択し、それに基づいて解釈を構成する。

#### メタファーの形式と解釈の表現形式

原文（詩）には  $X \text{ IS } Y$  という形式ではメタファーは必ずしも表現されず、 $Y$  だけが提示される。書き手は  $X$  の描写を  $X$  を使わずに  $Y$  を述べることによってこれを実現する。池上 (1967) の分類によれば、これは「象徴」にあたる。読み手は  $Y \text{ IS } X$  という形式で  $X$  を発見（解釈）する。描写の方法（可能な  $Y$  の数）も解釈結果（可能な  $X$  の数）も複数あり得る。

#### 復原可能性について

詩のことばの特徴として、少ない語で簡潔に表現されるがゆえの省略 (ellipsis) が多いことが挙げられる。先行発話の形式は後続発話の形式に制約することがある。詩の表現の解釈という点から見れば、先行する発話（詩）の省略がその復原を誘発

し、解釈として表れる文の選択の自由を制約する可能性がある。

#### Wilson (2000) の ellipsis の定義<sup>5</sup>

Structural gaps that can be related to (a) omitted elements recoverable from the linguistic context, (b) other potential syntactic forms, (c) the situational context

#### 日常的な発話における省略 (ellipsis)<sup>6</sup> の例

(9) A: What is the capital of England?

B: London [ ].

(10) A: Millions of years ago, Martians landed on earth. And found apes.

They doctored the apes, and made ‘em think.

B: Why?

A: Well ... as an experiment.

B: Pretty cruel.

復原できる確実性 (recoverability) には程度がある。たとえば前の文 (10) に対する照応としての文 (11) の A と前の文に対する応答として可能性を持つ文 (11) の B とでは、復原できる確実性は前者の方が高い。

(11) A: Why [did they doctor the apes, and made ‘em think]?

B: [That was a] Pretty cruel [experiment].

さらに詩の場合は「圧縮された」表現から成り立っていると考えられる。

#### 「圧縮」の定義

[C]ompression denominates whatever creates density or compactness of meaning in language. It may stem from ellipsis of function words, dense use of metaphor, highly associative vocabulary, abstract vocabulary in complex syntax, or any other language use that reduces the ratio of what is stated to what is implied. (Miller 1987: 24)

大まかに言って、言うべき語数を減らし、しかし、意味は豊かに保つということ。一語が担うべき意味が多くなる。全体の語数を減らすことも複数の意味をひとつの語で表すことも「圧縮」である。そして、圧縮された表現は読み手によって復原さ

<sup>5</sup>Willson (2000: 18).

<sup>6</sup>さらに下位分類 (strict ellipsis, weak ellipsis, quasi-ellipsis) される場合もある。 (Quirk *et al.* 1985: 884).

れる)<sup>7</sup>。圧縮された形式は復元の過程で読み手の解釈を促す装置となり得る。

圧縮された表現に富む詩の例を挙げる。統語的パターンの繰り返しが省略を復元する手がかりとなっている。

(12) Alter! When the Hills do [alter] — [I will alter]

Falter! When the Sun

Question if His Glory

Be the Perfect One—[I will falter]

Surfeit! When the Daffodil

Doth [surfeit] of the Dew—

Even as [she surfeits of ] Herself —Sir—

I will [surfeit]-of You—

(Emily Dickinson)

メタファーの意味がどのように解釈されるかを、解釈者の構築する首尾一貫性、メタファーの形式とその解釈を表現する形式、復元性または解釈の表現形式の選択の可能性に対する制約といった観点から資料を考察する必要がある。以下の疑問が考察を進めるにあたっての手がかりとなる。

形式の省略は読み手の解釈に影響を与えるとすれば、どのようにか？

詩の中のどの語を読み手が選択して自分の解釈のテキストに引用し、どのように首尾一貫性を保って再構成するのか？

## 参 考 文 献

- 阿部純一、桃内佳雄、金子康朗、李 光五 1994. 『人間の言語情報処理—言語理解の認知科学』サイエンス社.
- Beaugrande, Robert-Alain de and Wolfgang Ulrich Dressler 1981. *Introduction to Text Linguistics*. Essex: Longman.
- Brown, Gillian and George Yule 1983. *Discourse Analysis*. New York: Cambridge University Press.
- 池上嘉彦 1967. 『英詩の文法』研究社.
- Miller, C. 1987. *Emily Dickinson: A Poet's Grammar*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 仁田義雄、益岡隆志、郡司隆男、金水 敏 1997. 『文法』岩波講座 言語の科学 5. 岩波書店.
- Ortony, Andrew (ed.) 1993. *Metaphor and Thought*: 2nd edn. Cambridge: Cambridge

<sup>7</sup>読者は省略された表現を完全に原形に復元することを要求されるわけではない。

University Press.

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and J. Svartvik 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

リクール, ポール 1984. (久米博訳)『生きた隠喩』岩波書店.

Thomas, Jenny 1995. *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Addison Wesley Longman.

Turner, Mark 1991. *Reading Minds: The Study of English in the Age of Cognitive Science*. New Jersey: Princeton University Press.

Wilson, Peter 2000. *Mind the Gap: Ellipsis and Stylistic Variation in Spoken and Written English*. Essex: Pearson Education Limited.

### 質疑応答 (敬称略)

森岡 (コメンテーター) : 研究対象に解釈者 (読者) を含めた場合、特に個々人の心的な面への依存が大きい研究の場合は、アプローチ方法に難しさが伴うと考えられるが、具体的には今後どのようにアプローチしていくのか?

檜和 : 当面、心理学的アプローチを取ることは考えていないが、将来、読み手に対するアンケート調査などを必要に応じて検討したい。

三谷 : イメージとメタファーは関係があるのか? また、両者をどのようにとらえているのか? メタファーのレベルにも多々あるが創造的メタファー内での一括化もどうなのか? 例えば、創造的メタファーという定義にも関わらず、解釈者が皆同じものを想起出来るならば、創造的というレベルとしてどうなのかと感じた。

檜和 : メタファー産出の側から考えると、イメージがメタファーの源泉であると思われる。解釈する場合は、メタファーからイメージが想起されるだろう。両者には密接な関係がある。具象物のイメージは個々に違うが、イメージにはプロトタイプとしてのイメージ (例えば、典型的なカップのイメージ)、及び、色やテクスチャなどの詳細な情報が削がれてスキーマ化したイメージ (例えば、細くて長いもの) がある。前者のイメージは、ジュリエットは太陽だというようなメタファーが解釈される場合などに関与するであろうし、後者は、細くて長いものの線的イメージが時間に重ねられて、空間の「先」が時間の先 (例: 先の戦争) にメタファーとして転用される場合に関与する。突飛なメタファーをどう取り扱うのか、創造性をどう捉えるのかという問題については、ひとつひとつを全て記述していくことには意味がない。ある程度の一般化ができるレベルで創造性を捉える必要がある。極端に創



造的なメタファーでも、詩というフレームで提示されると、読者は解釈を試みようとする。コンピュータのランダム提示ではそのようにはいかないであろう。創造的メタファーであっても、読者が皆同じものを想起する場合もあるかもしれない。（言語のレベルでの）産出側と解釈側の創造性を分けて考えるべきか。

三谷： また、今発表での「省略」とはどの程度のレベルのものなのか？詩とはいえ文法的に完全に完結していない訳ではないだろうし、あくまでも結束性が低いレベルに止まるのではないか？

槇和： 詩の特徴は「統語的に非完結的」と述べたが、省略は結束性を示す語をなくしていくことであるとするなら、詩の言語に省略が多いことは「非完結」を意味しない。結束性が低いに訂正する。

文学部からの参加者： 心理学の立場から解釈には個人差（文化年齢等）があると思うし、書き手にとっても何らかの意図を持っているはずであるが、詩というジャンルを用いて表現しようとした意図（解釈された意図ではなく）に対してはどのように考えていくのか？また研究対象として詩を選んだのは何故か？

槇和： 書き手の意図は解釈者の信念や知識の中に反映されているものとして、間接的に取扱う。詩を研究対象として選んだ理由は、読み手が解釈をテキストに書くという行為が行われるから。また、通常のコミュニケーションでは複数の解釈の余地があるということは負の評価を受けるが、詩の場合は多様な解釈が許されるという点で興味深い。

向山： 解釈枠の設定について難しそうだがどうか？

槇和： 今回取り上げた事例のように、解釈枠となる背景知識が明示されている場合もあるだろう。解釈者が詩からどの語を選択し、自らのテキストに引用し、結束性を維持するかという観点から見たい。

李： 今後の研究ビジョンとしては、ディキンソンならディキンソンで1人の作家について調べていくのか、それとも詩というジャンル全体に対して広く様々なものにアプローチしていくのか？

槇和： 一人の詩人に絞るのではなく、ある特定の型のメタファーやイメージに絞って考察して行きたい。

李： ここでいうイメージとはどのようなものなのか？

槇和： 詩の中で提示される大枠としてのイメージ、たとえば、海について述べている詩であるというような観点から詩を選定する。

李： 読者の対象を研究者のような人とするのかそれとも広く一般的な人にとるのかといった点は、どのようにしていく予定なのか？

榎和： 当面は雑誌 *Explicator* から解釈例を集めようと考えているので、全く一般的読者というわけではない。雑誌の投稿者という特定の集団を形成する人々。将来、比較検討のため、一般読者から解釈例を集める必要もあるかもしれない。

李： 言語現象のデータを扱う場合、サンプルの抽出の仕方によっては解釈が限られ、一般化できないことがある。サンプルの抽出範囲とその必然性を示された方が良いのではないか。

榎和： 前向きに今後の検討課題とします。